

鋭い聲に意識が明瞭すると、音藏は四邊をキョロ／＼見廻はしながら、弾かれた様に身を起した。

「オツ 榊の旦那で……」

「僕が榊直也といふ事が判るかッ」

「へい……」

と云つて音藏は今度は自分の身軀を眺め出した。

「判る？、よし、音藏、其方は誰を許しを受けて僕の書齋に入つたッ」

「……」

「其方は何の怨みがあつて僕の原稿を土足にかけたかッ」

「エッ」

「其理由を云へ……其方が此程の亂暴を働くには理由があるだらう、それを包まず云へ」

「……」

音藏は黙つて俯向いた。

「黙つて居ては解らん、早く云へ、返答に依ては考へがある、其方を能く知つた僕は總てを許す」

して遣る、原稿紙に残つた此土足の痕だけは決して許す事は出来んぞッ」

聲色共に激しい直也をそつと見て音藏は眼を擦る。

「此原稿は僕の魂ぢや、「愛」といふ小説の爲に僕は今精神を捧げて居る、之は其原稿ぢや、其方は男の魂を土足にかけて済むと思ふのかッ」

(五〇)

音藏は漸く顔を上げた、酒の醒めた顔は蒼い。

「榊の旦那、ナル程俺は悪い事をしたに相違ございません、併し俺ア謝る事ア厭だ、今日はお前さんと喧嘩をオツ始めに来たんだからね」

「ナニ僕と喧嘩をしに来た？、ム面白い事をいふ、何の喧嘩をしに来た、魂を土足にかけた其方には此方に屹度云分があるのぢやが、先づ其方から聞う、さあ云へ」

「云はなくつて何うするもんか」

と音藏は胡座をかいて自棄に腕をまくつた。

「紳さんお前さんア小説が名人で今度ア「涙」ツて奴を書いた手柄で豪い學者達の仲間入をしなすつたといふ専ら取沙汰だが、評判と實際は大きな違いでお前さん巧く世間を瞞着して錢儲けをして居るんだね」

「世間を瞞着して金を儲ける？、其方僕に向かつてそんな事を云ふかッ」

「紳直也ツていふ似非小説作者に云ふのさ」

「ナニ」

「今お前さんが書いてる「愛」ツて小説は自分の身體を捨て倚邊の無い女を救ふ豪い人の事を筋にしたんだつてね、俺ア此處へ来た兩人の客人の話を聞いて知つてるんだ、それから本屋で賣つてる「涙」を読んだ人の話に雪江ツて女の眞の涙で悪黨共が改心したり、薄情な亭主が本心に立復るツていふ涙の零れる筋と聞いたが、それがお前さん見ていな口先許りの同情で、イザとなると弱い者を見殺しにして逃げ出す様な、卑怯な徒輩の口から出任せ、見て来た様な嘘をつく講釋と違はぬい小説ぢやア有難くも可笑しくも無いや、何にも知らね正直な世間を瞞着して本が賣りていばツかりの錢儲けと云つたのが俺の過言かッ」

「はッは、其方には彼程説いて聞かせたのが未だ解らぬと見わるな」

「解つてらア、いよゝの性根が解つたから愛想が盡きて喧嘩に來たんだ、涙だの愛だのと優しい文句を弄くつたツて筆と腹が反對ぢやア嘘を稼業の女郎と同じだ、似非小説作者と云はれて文句があるならグツとでも云つて見なせい」

「僕が大野夫人母子を救はぬからそれで同情が無いの卑怯ぢやのと云ふのか」

「知れた事だッ」

と音藏は喚り立つた。

「不義の疑ひが可いねいの、小説が書けねいのと口から出任せ体の善い事を云つたつてお前さんが逃げる腹たア此音藏には能く解つたのだ、生の親よりお前さんを慕ふ坊様が現在悪い奴の手に捉まつて難義苦勞をしてゐるツて事を知りながら知らぬ顔をするお前さんの心はそれでも同情があると云へるかね」

直也は黙つて机に倚れた。

「いくら小説が大事だつて目の前で悶き死する奥様が坊様と先生弟子の縁に繋がるお前さんが黙つて見殺にするツて法はお前さん達學者仲間には知らぬ事、俺ら下等社會の義理人情には無い事だ、それを思つて絶る俺ア種々に術を變へ品をかえて相談相手に頼みに來たのだが何時

も体の善い謝絶ばかり、エ、勝手に爲あがれ、モウ頼まねねと諦めて……情々歸ると奥様が……音藏僅た一目薫に遇つて死にたい……と瘦せた手を合はせて拜まれる俺ア、こ、この身軀が碎ける様だ……この惨たらしい有様を話したらイクラお前さんでも涙の愛のと小説を書く筆の手前だつて何にか相談に乗つて貰ゆるだらうと……あれから三度も道つて来たが何時も不在だで情なう追拂ひだ、優しい情愛の籠つた、床い性根の男と思つたのが此方の過信で始めの深切は女郎の嘘と同じだと覺つた時の馬鹿々々しさ、エ、此上は誰も頼まねい、死ぬる覺悟でかかつたら坊様は奪返せるだらうと、昨夜の風雨を幸ひに、巽伯爵の邸へ忍び込む積で命を投げ出した一仕事も、心ばかりが強くつてもモウ役に立ねい此老體だ、引縛られて警察で一晚寝ねいで考へたのがお前さん所へ暴れ込んで云つて云つて云捲り、何方が負けるか喧嘩の覺悟だ、サア女郎と同じ小説作者と云つたのが口惜しけれ立派に辯解して見なせい、へん涙に愛が聞いて呆れらア、お前さん見ていな情を知らねい人間に義理人情の筋合が書けれア誰だつて小説作者だツ」

男 (後編) (終)

大正三年二月廿五日印刷  
大正三年三月二日發行

定價金五十錢

著者 羽 様 荷 香

發行者 樋 口 源 次 郎  
大阪市南區穀谷仲之町  
二百二十四番屋敷

印刷者 河 上 貞 次 郎  
大阪市西區新町北通  
一丁目五十番地

不許複製

【附 奥 編 後 男】

發賣元

大阪市南區三休橋  
穀谷南へ入西側

樋口隆文館  
(振替口座大阪八七九七)

樋口隆文館

營業案内

- △樋口隆文館は主として小説の出版……及び其卸賣を専業と致居候に付各地方の販賣業者諸君……及び貸本を營業とせられる諸君は多少に拘らず御注文被下度候
- △卸賣目錄御入用の諸君は郵券參錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ
- △樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さず新版發行致べく候
- △樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候
- △樋口隆文館の所在地は大阪三休橋穀谷南入西側に御座候、振替番號は大阪八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文には汽車便又は汽船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候





276
447

終

